

大学生における街中での異性関係開始

—男女間の相互作用に着目して—

仲嶺 真*

Opposite Sex Relationship Initiation in Town among Undergraduates: Focusing on Interactions between Male and Female

Shin NAKAMINE*

The purposes of this study were to examine how frequently did approaching unacquainted opposite-sex person in town occur in real life, how was approaching evaluated, and how did women and men interact after women were approached. One hundred and eighty three female undergraduates responded to questionnaire about experience concerning being approached by unacquainted men. Two hundred and sixteen male undergraduates responded to questionnaire about experience concerning approaching unacquainted women. About 80% of female respondents reported to experience being approached by unacquainted men, but on the other hand about 12% of male respondents reported to experience approaching unacquainted women. And chatting-up was evaluated negatively. As for interactions, the analysis was conducted with Hayashi's quantification methods III. The results showed that four types of interaction processes existed. Especially, the results showed that when women were approached by men, who used "camouflage" lines, women were likely to talk "personal information" and so on with men and accept men's advances (e.g., Let's go eat).

key words: chatting up, relationship initiation, opposite-sex, social network

問 題

さまざまな対人関係を関係性から捉えると、所与性-任意性、親密性-疎遠性の2軸で分類できる(松井, 2010)。恋人や異性友人などの異性関係は、親密性ととも、任意性も高い。また、異性関係は精神的健康や発達において重要である(Havighurst, 1953; 松井, 1990)。そのため、異性関係開始(異性との友人関係や恋愛関係の開始)は重要な問題となる。

異性関係開始についての従来の研究は、学校や職場などの個人の社会的ネットワーク内での異性関係開始を念頭においていた(仲嶺, 2015)。しかし、

異性関係開始は、社会的ネットワーク外でも生じうる可能性がある(Kleinke, Meeker, & Staneski, 1986)、実際に、社会的ネットワーク外と考えられる街中での出会いが、異性関係開始のきっかけとなりうる場合がある(国立社会保障・人口問題研究所, 2012)。このような社会的ネットワーク外での異性関係開始は、社会的ネットワーク内での異性関係開始とプロセスが異なる可能性が示唆されている(仲嶺, 2015)。そのため、異性関係開始を包括的に理解するためには、社会的ネットワーク内だけでなく、社会的ネットワーク外における異性関係開始にも着目する必要があると考えられる。そこで、本研究では、実際に異性関係が開始する可能性がある街中

* 筑波大学人間総合科学研究科

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai 1-1-1, Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan
e-mail: s1430366@u.tsukuba.ac.jp

に着目して検討する。

このような街中での異性関係開始に着目した Kleinke et al. (1986) は、街中で異性関係を開始するためには、どのように話しかけるかが重要であると指摘し、異性関係開始にとって効果的な話しかけ方について質問紙調査を行った。その結果、話しかけ方は、“無害的”、“直接的”、“冗談的”の3種類であることが明らかにされた。“無害的”話しかけ方は、“社交的挨拶 (pleasantry) を通じて会話を生じさせるもの”、“直接的”話しかけ方は“好意を公然と伝えるもの”、“冗談的”話しかけ方は“性的なものがあるが、ユーモアを交えたもの”とされる (Cunningham & Barbee, 2008)。これら3種類の話しかけ方の好ましさを検討した結果、男性が女性に用いる“冗談的”話しかけ方は、他と比して好ましく評価されなかった (Cunningham, 1989; Kleinke et al., 1986)。

上述した知見は、言語的行動が街中での異性関係開始に及ぼす影響についての検討であるが、非言語的行動が街中での異性関係開始に及ぼす影響について検討した研究もある。

たとえば、Renninger, Wade, & Grammer (2004) は、観察実験を行い、女性とうまく話せた男性は、話せなかった男性に比べ、女性と話す前に、短時間の視線を女性に何度も向けていたこと、縮こまった動き (closed-body: たとえば、胸の前で腕を組む) をあまりしていなかったことを示した。また、Cunningham (1989) は、男性が話しかけるときに女性に接触するか否かが、女性の反応に及ぼす影響を検討した結果、接触の有無によって女性の反応に違いはないことを示した。

以上のように、どのような言語的、あるいは、非言語的行動が、街中での異性関係開始にとって効果的かについて、いくつかの研究が実施されている。しかし、これらの研究は、話しかける側の行動のみを対象にしていた。すなわち、話しかける側からの一方向的な視点でしか検討されていないという問題がある。異性関係を開始するためには、話しかける側と話しかけられる側の双方がどのように振る舞うかが重要である (Bredow, Cate, & Huston, 2008) ため、話しかける側と話しかけられる側の双方向的な視点での検討が必要と考えられる。この検討により、話しかける側と話しかけられる側がどのような相互作用を行って、社会的ネットワーク外において異性関

係を開始させるかについての新たな知見を提供可能となるであろう。

また、街中で話しかけられる、あるいは、話しかけることが、異性関係開始のきっかけとなりうる場合がある (国立社会保障・人口問題研究所, 2012) ことは明らかとなっているが、そのような行為が、日常的にどれだけ生じているか、実際に異性関係開始を目的に話しかけている人が存在するのかは示されていない。加えて、街中で話しかけられる、あるいは、話しかけることが、どのように捉えられているのか、すなわち、不快なものなのか否かについても検討されていない

そこで、本研究では、大学生を対象に、街中で話しかけられる、あるいは、話しかけることが実際にどの程度生じているのか、そのような行為は、不快に捉えられているのかを明らかにしたうえで、話しかけられた、あるいは、話しかけたときに、どのような相互作用が行われているのかについて探索的に検討する。ここで、大学生に着目したのは、異性関係が青年にとって重要な問題となる (Havighurst, 1953; 松井, 1990) ためである。なお、調査の際は、異性関係を開始するきっかけは、男性が作ることが期待されていること (McDaniel, 2005; Rose & Frieze, 1993) を考慮し、女性には街中で初対面の男性から話しかけられた経験について、男性には街中で初対面の女性に話しかけた経験について尋ねる。

また、相互作用に関する検討を補完する目的で、女性に対しては、話しかけられたときの不快感情にも着目する。ネガティブ感情は、環境が危険であることの合図となる (Schwarz, 2012) ため、女性がネガティブ感情を感じれば、男性に対応しないと考えられる。街中における男女間の相互作用と話しかけられたときの女性の不快感情との関連を検討することで、この点について確認する。

方 法

調査参加者と手続き

調査は、2012年、愛知、茨城、沖縄、東京の大学に在学する女子学生 183名 (平均年齢 20.14 ± 1.17 歳)、男子学生 215名 (平均年齢 20.93 ± 2.31 歳) を対象に集団回答形式で実施し、その場で回収した。なお、本研究は、所属機関の研究倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

質問紙の構成（女性）

キャッチセールスのような仕事上の勧誘，単に道を尋ねられたなどを除く，街中で初対面の男性に話しかけられた経験について質問することを質問紙の冒頭で説明したうえで，以下の項目に対して回答を求めた。

1. 話しかけられた頻度：これまでに話しかけられた頻度について，“1=0回”，“2=1回”，“3=2-5回”，“4=6-9回”，“5=10回以上”の5つの選択肢から単一回答で回答を求めた。なお，回答が“0回”であった調査参加者は7へ，複数回あった調査参加者は，最も印象的な経験を思い出した後，次に進むよう求めた。
2. 話しかけられ方：始めにどのように話しかけられたかについて，自由記述で回答を求めた。
3. 話した内容：話しかけられた後，どのような話をしたかについて，自由記述で回答を求めた。
4. 話しかけられたときの不快感情：話しかけられたときに感じた気持ちについて，“1=嫌だった”，“2=やや嫌だった”，“3=どちらでもない”，“4=やや嬉しかった”，“5=嬉しかった”の5件法で回答を求めた。なお，分析の際は逆転処理し，値が高いほど嫌な気持ちであったことを表す。
5. 要求の有無：男性から何らかの要求（ご飯に行こう，連絡先を教えて，など）があったかについて，“要求あり”，“要求なし”の選択肢から単一回答で回答を求めた。なお，“要求なし”と回答した調査参加者は7へ進むよう求めた。
6. 要求への対応の有無：男性からの要求に応じたか否かについて，“応じた”，“応じなかった”，“その他”の3つの選択肢から単一回答で回答を求めた。“その他”に関しては，具体的な対応方法の記述を求めた。
7. 話しかける行為に関する不快感：“街中で男性が初対面の女性に話しかける行為に対してどのように思うか”，および，“街中で初対面の男性から女性が話しかけられたときに，女性がその男性に対応する行為に対してどのように思うか”¹⁾の2項目それぞれに，“1=不快”，“2=やや不快”，“3=どちらで

もない”，“4=やや快”，“5=快”の5件法で回答を求めた。なお，分析の際は逆転処理し，値が高いほど不快度が高いことを表す。

質問紙の構成（男性）

キャッチセールスのような仕事上の勧誘，単に道を尋ねたなどを除く，街中で初対面の女性に話しかけた経験について質問することを質問紙の冒頭で説明したうえで，以下の項目に対して回答を求めた。

1. 話しかけた頻度：これまでに話しかけた頻度について，“1=0回”，“2=1回”，“3=2-5回”，“4=6-9回”，“5=10回以上”の5つの選択肢から単一回答で回答を求めた。なお，回答が“0回”であった調査参加者は8へ，複数回あった調査参加者は，最も印象的な経験を思い出した後，次に進むよう求めた。
2. 対象選択の理由：話しかけた女性を話しかける相手として選んだ理由について，自由記述で回答を求めた。
3. 話しかけた目的：どのような目的で女性に話しかけたかについて，自由記述で回答を求めた。
4. 話しかけ方：始めにどのように話しかけたかについて，自由記述で回答を求めた。
5. 話した内容：話しかけた後，どのような話をしたかについて，自由記述で回答を求めた。
6. 要求の有無：女性へ何らかの要求（ご飯に行こう，連絡先を教えて，など）をしたかについて，“要求あり”，“要求なし”の選択肢から単一回答で回答を求めた。なお，“要求なし”と回答した調査参加者は8へ進むよう求めた。
7. 要求への対応の有無：女性が要求に応じたか否かについて，“応じた”，“応じなかった”，“その他”の3つの選択肢から単一回答で回答を求めた。“その他”に関しては，具体的な対応方法の記述を求めた。
8. 話しかける行為に関する不快感：女性の調査参加者の話しかける行為に関する不快感と同項目を用いた。分析の際にも，女性の調査参加者と同じく，逆転処理をした。

結 果

以下の分析は，回答の信憑性が明らかに疑われた2名分を除き，女性182名，男性214名分の回答データを用いて行った。また，欠損値および本調査の趣旨から外れた自由記述は，該当する分析から除

1) この項目における“対応する”とは，“会話する”を意味しており，調査参加者の自由記述（本論文と関連しないため詳細は省く）からも“会話する”を想定して回答していることが窺えた。

Table 1 話しかける行為に関する不快感

	女性			男性			性差 <i>t</i> (<i>df</i>)	効果量 <i>d</i>
	<i>n</i> ^{a)}	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i> ^{a)}	<i>M</i>	<i>SD</i>		
男性が女性に話しかける行為	180	4.19 ^{b)}	0.84	213	3.36 ^{b)}	0.91	<i>t</i> (391)=9.38***	.95
女性が男性に対応する行為	178	3.44 ^{b)}	0.81	212	3.08	0.77	<i>t</i> (388)=4.53***	.46

*** $p < .001$

a) 欠損値を除去した値

b) 1 標本の *t* 検定の結果が 0.1% 水準で有意であったことを示す

外した。なお、以下の、話しかける行為に関する不快感の分析、男性から話しかけられた頻度/女性に話しかけた頻度の分析では、分析対象者すべてのデータを分析に用い、それ以外は、話しかけられた、あるいは、話しかけた経験のある分析対象者のみのデータを分析に用いた。

話しかける行為に関する不快感

話しかける行為に関する不快感の平均値が、“3=どちらでもない”と異なるかを検討するために、男性が話しかける行為に対する不快感、話しかけられた女性に対応する行為に対する不快感の各項目に対して男女別に 1 標本の *t* 検定を行った (Table 1)。その結果、男性が話しかける行為に対しては、男女ともに“3=どちらでもない”よりも不快感の平均値が高く、不快に感じていた (男性: $t(212)=5.73, p < .001$; 女性: $t(179)=19.04, p < .001$)。話しかけられた女性に対応する行為に対しては、女性は“3=どちらでもない”よりも不快感の平均値が高く、不快に感じていた ($t(177)=7.23, p < .001$) が、男性は“3=どちらでもない”と不快感の平均値が異ならず、快とも不快とも感じていなかった ($t(211)=1.43, ns$)。また、話しかける行為に関する不快感の性差を検討するために、男性が話しかける行為に対する不快感、話しかけられた女性に対応する行為に対する不快感それぞれを従属変数とし、*t* 検定を行った (Table 1)。その結果、男性が話しかける行為に対しても ($t(391)=9.38, p < .001, d=.95$)、話しかけられた女性に対応する行為に対しても ($t(388)=4.53, p < .001, d=.46$)、ともに男性より女性の方が不快に感じていた²⁾。

男性から話しかけられた頻度/女性に話しかけた頻度

街中で初対面の男性から話しかけられたことがある女性は、83.0% ($n=137$)であった一方、街中で初対面の女性に話しかけたことがある男性は、12.2%

Table 2 話しかけられた頻度および話しかけた頻度

	女性 ^{a)}		男性 ^{b)}	
	話しかけられた頻度		話しかけた頻度	
0 回	17.0%	(28)	87.8%	(166)
1 回	8.5%	(14)	4.8%	(9)
2-5 回	43.6%	(72)	4.2%	(8)
6-9 回	14.5%	(24)	1.1%	(2)
10 回以上	16.4%	(27)	2.1%	(4)

注) () の数値は該当回答者数

a) $n=165$ b) $n=189$ ($n=23$) であった (Table 2)。

要求の有無と要求への対応の有無

話しかけられた経験のある女性のうち、74.8% ($n=107$) は男性から何らかの要求を受けており、そのうち、13.1% ($n=14$) は男性からの要求に応じたと回答した。また、話しかけた経験のある男性のうち 76.9% ($n=20$) は、女性に何らかの要求をしており、そのうちの 80.0% ($n=16$) が、話しかけた女性はその要求に応じたと回答した。

対象選択の理由および話しかけた目的

話しかけた女性を話しかける相手として選んだ理由、および、話しかけた目的を検討するために、対

- 話しかける行為に関する不快感について、女性では話しかけられた経験の有無、男性では話しかけた経験の有無を独立変数として男女別に *t* 検定を実施した。その結果、男性が話しかける行為に対しても、話しかけられた女性に対応する行為に対しても、話しかけられた経験の有無 (話しかける行為に対する不快感: $t(161)=0.58, ns, d=.12$; 対応する行為に対する不快感: $t(159)=0.05, ns, d=.01$)、あるいは、話しかけた経験の有無 (話しかける行為に対する不快感: $t(186)=0.11, ns, d=.03$; 対応する行為に対する不快感: $t(185)=0.12, ns, d=.03$) によって話しかける行為に関する不快感に差はなかった。

Table 3 対象選択の理由および話しかけた目的に対する記述の分類結果

カテゴリ	記述例	記述された割合	
対象選択の理由 ^{a)}			
対象の外見	かわいかった	29.0%	(9)
行為者の状況	暇だった	19.4%	(6)
親密性希求	仲良くなりたかった	16.1%	(5)
対象の利用可能性	話しかけやすそうだった	12.9%	(4)
類似点の発見	同じ趣味をもっていると思った	9.7%	(3)
その他		12.9%	(4)
合計		100.0%	(31)
話しかけた目的 ^{b)}			
親密性希求	仲良くなりたかった	33.3%	(8)
会話希求	話したかった	29.2%	(7)
女性との行動希求	食事に行きたかった	20.8%	(5)
その他		16.7%	(4)
合計		100.0%	(24)

注) () の数値は記述数, % は総記述数に対する比率

a) $n=25$

b) $n=24$

対象選択の理由, および, 話しかけた目的に関する男性分析対象者の自由記述回答を分類した³⁾。分類の結果, 対象選択の理由は, 6 個のカテゴリ, 話しかけた目的は, 4 個のカテゴリに分けられた (Table 3)。対象選択の理由において最も多くの記述が分類されたのは, “対象の外見 (かわいかった, など)” であり, 話しかけた目的は, “親密性希求 (仲良くなりたかった, など)” であった。

話しかけられ方／話しかけ方および話した内容

女性は初対面の男性からどのように街中で話しかけられているのか, また, 男性は初対面の女性にどのように街中で話しかけているのか, そして, どのような話をしているのかを検討するために, 話しかけられ方, 話しかけ方, 話した内容について, 男女別に自由記述回答を分類した。

分類の結果, 女性では, 話しかけられ方, 話した内容ともに 7 個のカテゴリに分類された (Table 4)。話しかけられ方において最も多く記述が分類されたカテゴリは, “現状確認 (何してるの?, など)” で

あった。話した内容においては, “拒否 (断った, など)” であった。また, 男性における話しかけ方および話した内容は, ともに 6 個のカテゴリに分類された (Table 4)。話しかけ方において最も多く記述が分類されたカテゴリは, “個人情報への質問 (学生ですか?, など)”, 話した内容では, “個人情報 (地元はどこ?, など)” であった。

会話内容と要求の有無および要求への対応の有無との関連

男性分析対象者のデータは少数であったため, 女性分析対象者のデータのみを用いて, 話しかけられ方, および, 話した内容と, 男性からの要求の有無や要求への対応の有無との関連について, 数量化理論Ⅲ類により検討した。まず, 話しかけられた経験のある女性分析対象者について, 話しかけられ方, 話した内容に関する自由記述回答を, 各カテゴリ (Table 4) に該当する場合は 2, 該当しない場合は 1 としてコーディングを行った⁴⁾。

3) 分類は, 心理学を専攻する女子大学院生 1 名と筆者が類似する記述を合議により分類した。本研究の分類は, すべて同じ手続きで行った。なお, 複数記述していた分析対象者の回答は, 各記述を分類した。そのため, Table 3 や Table 4 の記述された割合は, 各カテゴリがどの程度出現したかを意味する。

4) コーディングは, 心理学を専攻する男子大学院生 1 名と筆者がそれぞれ行った。両者のコーディング結果を基に *Kappa* 係数を算出した結果, 話しかけられ方 ($k=.90$), 話した内容 ($k=.88$) ともに高い *Kappa* 係数を得たため, 筆者によるコーディング結果を採用した。なお, “その他” カテゴリに関しては, 該当数が少なかったため, 分析から除外した。

Table 4 話しかけ方, 話しかけられ方, 話した内容に対する記述の分類結果

カテゴリ	記述例	記述された割合	
話しかけ方 (男性) ^{a)}			
個人情報への質問	学生ですか?	32.1%	(9)
挨拶	こんにちは	14.3%	(4)
現状確認	何してるの?	14.3%	(4)
誘い	アドレスを教えて	7.1%	(2)
カモフラージュ	コンビニの場所を教えて	3.6%	(1)
その他		28.6%	(8)
合計		100.0%	(28)
話しかけられ方 (女性) ^{b)}			
現状確認	何してるの?	36.9%	(55)
挨拶	こんにちは	20.8%	(31)
呼びかけ	あの一	16.1%	(24)
カモフラージュ	これ落としましたよ	12.1%	(18)
個人情報への質問	学生ですか?	9.4%	(14)
誘い	アドレス教えて	2.7%	(4)
その他		2.0%	(3)
合計		100.0%	(149)
話した内容 (男性) ^{c)}			
個人情報	地元はどこ?	34.3%	(12)
誘い	アドレス教えて	28.6%	(10)
表面的会話	世間話をした	20.0%	(7)
発展的会話	将来の夢について話した	5.7%	(2)
予定の確認	これから何するの?	5.7%	(2)
その他		5.7%	(2)
合計		100.0%	(35)
話した内容 (女性) ^{d)}			
拒否	断った	23.7%	(44)
個人情報	何歳ですか?	22.6%	(42)
誘い	食事に行きませんか?	17.7%	(33)
拒絶	無視した	15.6%	(29)
表面的会話	世間話をした	8.1%	(15)
予定の確認	これから何するの?	7.5%	(14)
その他		4.8%	(9)
合計		100.0%	(186)

注) () の数値は記述数, %は総記述数に対する比率

a) n=24

b) n=137

c) n=22

d) n=132

その後, 数量化理論Ⅲ類によって, カテゴリスコアの数量1・2軸を算出した。固有値は順に .15, .13であった。算出された2軸までのカテゴリスコアを用いてクラスタ分析(Ward法)を行った結果, 4つのクラスタを抽出した。カテゴリスコアのプロット図およびクラスタを Figure 1 に示した。第一は, “呼びかけ”, “現状確認”, “拒絶” でまとまるクラスタであった。第二は, “誘い(話しかけられ方),

“拒否” でまとまるクラスタであった。第三は, “挨拶”, “個人情報への質問”, “表面的会話”, “誘い(話した内容)” でまとまるクラスタであった。第四は, “カモフラージュ”, “予定の確認”, “個人情報” でまとまるクラスタであった。また, 男性からの要求がなかった女性分析対象者を要求なし群, 要求があり, かつ, 要求に応じた女性分析対象者を対応あり群, 要求はあったが応じなかった女性分析対象者

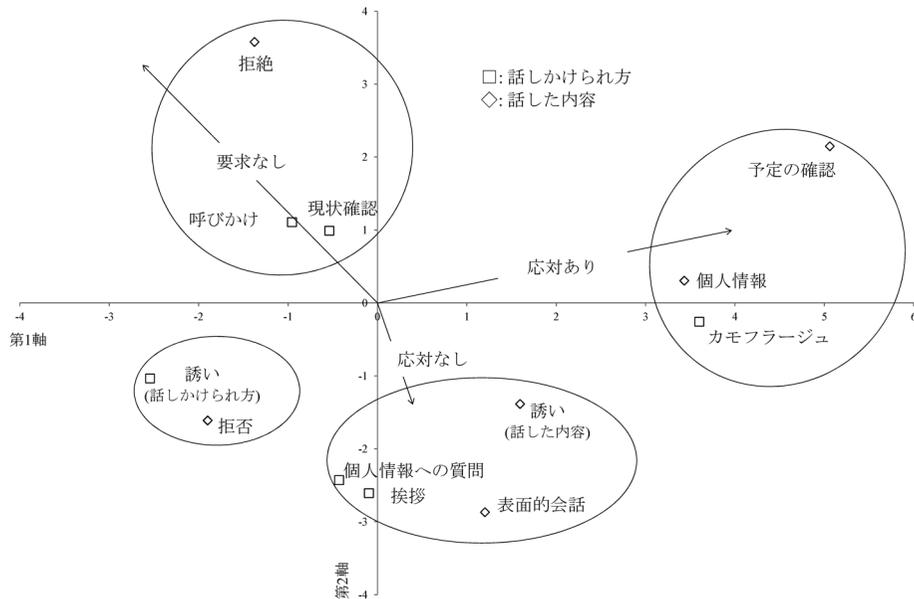


Figure 1 話しかけられ方、話した内容のカテゴリスコアおよび要求の有無、対応の有無のサンプルスコア。円で囲まれた範囲は、同クラスタであることを示す。

を対応なし群とし、各群のサンプルスコアを算出した。その値を10倍し、ベクトル表記でFigure 1に示した⁵⁾。“呼びかけ”などでまとまるクラスタの方向に要求なし群が布置され、“挨拶”などでまとまるクラスタの方向に対応なし群が布置され、“カモフラージュ”などでまとまるクラスタの方向に対応あり群が布置された。

会話内容と話しかけられたときの不快感情および話しかける行為に関する不快度との関連

会話内容と話しかけられたときの不快感情および話しかける行為に関する不快度との関連を検討するために、上述の数量化理論Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアと話しかけられたときの不快感情 ($M=4.09, SD=0.92, n=139$)、および、話しかける行

為に関する不快度（男性が話しかける行為に対する不快度と話しかけられた女性に対応する行為に対する不快度の各項目）との Pearson の相関係数を求めた。その結果、1軸と話しかけられたときの不快感情との間にのみ有意傾向の負の相関関係が示された ($r(136)=-.15, p<.10$)⁶⁾。

考 察

本研究では、大学生において、街中で話しかけられる、あるいは、話しかけることが、どの程度生じているのか、そのような行為は、不快に捉えられているのか否か、街中において男女間でどのような相互作用が行われているのかについて探索的に検討した。

街中での異性関係開始に関する不快度

話しかける行為に関する不快度の結果から、女性は、男性が話しかける行為も、話しかけられた女性に対応する行為も不快に感じており、男性は、男性が話しかける行為に対してのみ不快に感じていた。

5) ベクトル表記の手続きは、以下のように行われた。まず、数量化理論Ⅲ類によって、各分析対象者の1軸、2軸のサンプルスコアを算出した。各分析対象者を、“要求なし群”、“対応なし群”、“対応あり群”に分割し、群ごとに1軸、2軸のサンプルスコアを平均した。各群の1軸、2軸のサンプルスコアの平均値を10倍して布置したが、ベクトルの終点である。なお、サンプルスコアを10倍したのは、ベクトルの視認性を高めるためであり、ベクトルは、各群に割り当てられた分析対象者が、平均してどの方向に布置されているかを示すものである。

6) その他の結果は、以下のとおりであった。2軸と不快感情 ($r(136)=.03, ns$)、1軸および2軸と男性が話しかける行為に対する不快度 ($r(137)=.05, .03, ns$)、および、話しかけられた女性に対応する行為に対する不快度 ($r(135)=-.10, .03, ns$)。

加えて、女性は男性より、男性が話しかける行為に対しても、話しかけられた女性に対応する行為に対しても、不快に感じていた。これらの結果は、話しかける行為が、とくに女性において否定的に捉えられていることを表していると考えられる。街中での異性関係開始は、女性にとって許容されていないことが示唆された。

街中での異性関係開始のきっかけ

話しかけられた頻度、話しかけた頻度の結果から、初対面の男性から話しかけられた経験のある女性は多い一方で、話しかけた経験のある男性は少ないことが示された。また、対象選択の理由や話しかけた目的の分類結果からは、男性は女性と会話したり、仲良くなりたいといった目的で話しかけている様子が窺え、それは、女性の外見に影響されることが示唆された。これらの結果から、男性は異性関係開始を目的に街中で話しかけていること、男性よりも女性の方が、街中での異性関係開始のきっかけを多く有していることが示唆される。

また、話しかけた経験のある男性が少なかった理由としては、以下の2点が考えられる。第一に、特定の男性が多く女性の女性に話しかけている可能性である。街中で初対面の女性に話しかけるといった行動を行うか否かには個人差が存在する(Hall, Carter, Cody, & Albright, 2010)。そのため、男性の中でも、街中で初対面の女性に話しかける人と話しかけない人が存在し、話しかけた経験のある男性は少なくなった可能性がある。第二に、調査参加者が大学生のみであったために少なくなった可能性である。本研究の調査参加者の男性は、共学の大学に通学していた。そのため、社会的ネットワーク内で異性関係を開始できる環境にあり、社会的ネットワーク外での異性関係開始を必要としていなかったと考えられる。また、社会人や大学に通っていない男性が、話しかけていた可能性もあろう。

今後、調査参加者の範囲を拡大することで、話しかけた経験のある男性が少ない原因が明らかとなるであろう。

街中での男女間の相互作用過程

話しかけられ方、話しかけ方、および、話した内容の分類結果では、男女間ではほぼ同様の内容が得られ、街中での男女間の会話には、挨拶があったり、個人情報について話したりなど、ある程度決まった

形式があることが示された。また、本研究で明らかにされた話しかけられ方、および、話しかけ方は、Kleinke et al. (1986)で示された話しかけ方の下位分類と考えられる。すなわち、“呼びかけ”、“挨拶”、“現状確認”、“個人情報への質問”、“カモフラージュ”は、“無害的”に相当し、“誘い”は、“直接的”に相当すると考えられる。しかし、“冗談的”に相当する話しかけられ方、あるいは、話しかけ方は、本研究では確認されなかった。“冗談的”話しかけられ方、あるいは、話しかけ方は、生起頻度が非常に少ない(Kleinke et al., 1986)。そのため、本研究では、確認されなかった可能性がある。この点に関しては、話しかけられた、あるいは、話しかけた経験のある調査参加者数を増やして検討する必要があるとともに、質問の仕方を工夫する必要もあるであろう。

話しかけられ方、および、話した内容に対する数量化理論Ⅲ類とクラスタ分析の結果では、4種類のクラスタを生成した。これらのまとまりから、以下のような相互作用過程が存在すると推察される⁷⁾。第一は、初対面の男性から話しかけられるときに、“呼びかけ(ねえねえ、など)”や“現状確認(何してるの?、など)”をされたりした場合には、女性は“拒絶(無視する、など)”するという過程である。第二は、男性から“誘い(食事に行こう、など)”を受けた場合には、女性は“拒否(断る、など)”するという過程である。第三は、男性から話しかけられるときに、“挨拶(こんにちは、など)”や“個人情報への質問(学生ですか?、など)”をされたりした場合には、女性は“表面的会話(適当に相づちする、など)”をしたり、“誘い(食事に行こう、など)”を受けたりするという過程である。第四は、“カモフラージュ(これ落としませんでしたか?、など)”で話しかけられた場合には、“個人情報(年齢、など)”について話したり、“予定の確認(これからどこ行くの?、など)”をされたりするという過程である。

7) 阪神・淡路大震災の避難所リーダーの研究(清水・水田・秋山・浦・竹村・西川・松井・宮戸, 1997)では、数量化理論Ⅲ類によって避難所を類型化し、そこから、避難所運営のパターンを推察している。本研究は、これに倣い、相互作用過程を推察した。

これら4種類の相互作用過程のうち、ある程度会話が生じるのは、第三と第四の過程であり、その結果として、どちらの過程でも男性からの要求（食事に行こう、など）が生じる。しかし、第三の過程では、その要求に女性が応じない一方で、第四の過程では、女性はその要求に応じやすいことが示された。

また、これら4種類の相互作用過程は、話しかける行為に関する不快度とは関連せず、話しかけられたときの不快感情との関連も小さかった。したがって、女性が話しかけてきた男性と会話するか否かや、男性からの要求に応じるか否かは、街中での異性関係開始に関する不快度や話しかけられたときの感情とは関連せず、どのように話しかけられ、どのような話をしたかによって決まる可能性が示唆された。

以上の数量化理論Ⅲ類による結果をまとめると、女性は、“挨拶”、“個人情報への質問”、“カモフラージュ”で男性から話しかけられた場合に、話しかけてきた男性と会話をし、とりわけ、“カモフラージュ”で話しかけられた場合は、その後、“個人情報”や“予定の確認”について話をするため、男性からの要求（食事に行こう、など）に応じやすいことが示された。“無害的”話しかけられ方 (Kleinke et al, 1986) でも、下位分類（“挨拶”か“カモフラージュ”か、など）によっては、その後の会話内容に影響し、その結果として、男性からの要求に応じるか否かに影響すると考えられる。

とくに、“カモフラージュ”の場合に、“個人情報”や“予定の確認”について話をし、男性からの要求にも応じやすい理由としては、“カモフラージュ”が、それ以外の話しかけられ方に比べ、男性の意図に悪意はないと女性が判断しやすいためと考えられる（たとえば、男性による“これ落としませんでしたか？”は、“落とし物を拾って届ける”という意図であると女性は判断するであろう）。このように、話しかけられ方によって、その男性と会話するか否かに対する女性の意思決定は異なり、その後の会話内容によって、男性からの要求に応じるか否かに対する女性の意思決定も異なる可能性が示された。しかし、本研究は探索的な検討であった。話しかけられ方によって女性の対応（会話するか否か）が異なるか否かや、その後の会話内容によって男性からの

要求に応じるか否かが異なるかについては、今後、確証的な検討が必要であろう。

本研究の課題

本研究の課題として、以下の3点が挙げられる。

第一に、結果の一般化可能性である。女子大学生の約6割は、明らかに性的な誘いを意図した初対面の男性から話しかけられた経験がある (Sakaguchi & Hasegawa, 2007) にも関わらず、本研究では、そのような記述はみられなかった。これは、男性に関しては、大学生では、明らかに性的な誘いを意図して話しかけた経験がそもそもないか、あるいは、社会的望ましさの観点からそのような記述をしなかった可能性が考えられる。女性に関しては、本研究の教示に一因がある可能性がある。すなわち、“性的な誘いを意図した男性から話しかけられた経験”とは明示しなかったため、それよりも記述しやすい“性的でない話しかけられた経験”を記述した可能性である。明らかに性的な誘いを意図して話しかけられた（話しかけた）経験とそのような意図のない話しかけられた（話しかけた）経験を別々に教示して調査したり、面接調査を実施したりすることで、この点は解決可能となるであろう。また、本研究の対象者は、大学生であったため、大学生以外にも同様の結果が得られるかは、今後の検討が望まれる。

第二に、非言語行動を検討していない点である。本研究では、Kleinke et al. (1986) の指摘に基づき、話しかけ方、あるいは、話しかけられ方に着目したが、実際の場面では、非言語行動も影響するであろう。今後は、非言語行動も組み合わせた検討が必要と考えられる。

第三に、男性が“カモフラージュ”を使用する理由の検討である。男性の“カモフラージュ”の使用が女性との会話に繋がりがやすく、その結果として、男性からの要求に女性が応じやすくなることを踏まえると、男性は会話のきっかけを作る戦略として“カモフラージュ”を使っている可能性がある。しかし、街中で話しかけられることは、犯罪の発端となりうるという指摘 (坂口, 2012) を考慮すると、女性が“カモフラージュ”で話しかけられた場合に、男性に対応しやすいことは危険な側面も孕む。すなわち、悪意のある男性が、“カモフラージュ”で話しかけてきた場合である。どのような男性が、“カモフラージュ”を使用しやすいのかを検討する

ことで、そのような危険性を減らす一助ともなり、社会的ネットワーク外の異性関係開始について、新たな知見も得られるであろう。

謝辞

本研究にご指導頂いた松井 豊教授（筑波大学）に深く御礼申し上げます。本論文執筆にあたり、筑波大学大学院人間総合科学研究科の古村健太郎氏、高本真寛氏、千島雄太氏に多くのご助言を賜りました。分析の際には、筑波大学大学院人間総合科学研究科の上條菜美子氏、津留 寛氏にご協力いただきました。調査参加者募集の際には、池田賢司氏（名古屋大学環境学研究所）にご協力いただきました。また、多くの調査参加者の方にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- Bredow, C. A., Cate, R. M., & Huston, T. L. 2008 Have we met before? A conceptual model of first romantic encounters. In Sprecher, S., Wenzel, A., & Harvey, J. (Eds.), *Handbook of Relationship Initiation*. New York: Psychological Press, pp. 3-28.
- Cunningham, M. R. 1989 Reactions to heterosexual opening gambits: Female selectivity and male responsiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 27-41.
- Cunningham, M. R., & Barbee, A. P. 2008 Prelude to a kiss: Nonverbal flirting, opening gambits, and other communication dynamics in the initiation of romantic relationship. In Sprecher, S., Wenzel, A., & Harvey, J. (Eds.), *Handbook of Relationship Initiation*. New York: Psychological Press, pp. 97-120.
- Hall, J. A., Carter, S., Cody, M. J., & Albright, J. M. 2010 Individual differences in the communication of romantic interest: Development of the flirting styles inventory. *Communication Quarterly*, **58**, 365-393.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human Development and Education*. New York: Longmans.
- Kleinke, C. L., Meeker, F. B., & Staneski, R. A. 1986 Preference for opening lines: Comparing rating by men and women. *Sex Roles*, **15**, 585-600.
- 国立社会保障・人口問題研究所（編）2012 第14回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）—第Ⅱ報告書—わが国独身層の結婚観と家族観 国立社会保障人口問題研究所 2012年3月30日 <<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/207750.pdf>>
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊 2010 対人関係の捉え方 松井 豊（編著）朝倉実践心理学講座 8 対人関係と恋愛・友情の心理学 朝倉書店, pp. 1-8.
- McDaniel, A. K. 2005 Young women's dating behavior: Why/why not date a nice guy? *Sex Roles*, **53**, 347-359.
- 仲嶺 真 2015 街中で初対面の男性から話しかけられた女性の判断と対応 心理学研究, **85**. (印刷中)
- Renninger, L. A., Wade, T. J., & Grammer, K. 2004 Getting that female glance: Patterns and consequences of male nonverbal behavior in courtship contexts. *Evolution and Human Behavior*, **25**, 416-431.
- Rose, S., & Frieze, I. H. 1993 Young singles' contemporary dating scripts. *Sex Roles*, **28**, 499-509.
- 坂口菊恵 2012 ナンパを科学する 思春期学, **30**, 22-28.
- Sakaguchi, K., & Hasegawa, T. 2007 Personality correlates with frequency of being targeted for unexpected advances by strangers. *Journal of Applied Social Psychology*, **37**, 948-968.
- Schwarz, N. 2012 Feelings-as-information theory. In Van Lange, P. A. M., Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T. (Eds.), *Handbook of Theories of Social Psychology*, Vol. 1. London: Sage Publications, pp. 289-308.
- 清水 裕・水田恵三・秋山 学・浦 光博・竹村和久・西川正之・松井 豊・宮戸美樹 1997 阪神・淡路大震災の避難所リーダーの研究 社会心理学研究, **13**, 1-12.

(受稿: 2014.4.22; 受理: 2014.11.10)